秀賞

水泳の「ちから」

新潟県長岡市立南中学校
一年　相　﨑　隆　成

私は水泳が大好きです。毎日練習して努力をすれば必ずタイムが速くなるからです。私は三歳のときから水泳を習っています。小学六年生のときには平泳ぎで県の大会で優勝することもできました。水泳は努力をすれば必ず結果が出ると思っていました。ですがこの夏、私は努力だけではない「ちから」が水泳にあることに気づきました。

地区大会で上位入賞を果たすことができ、私は、変わらず毎日の練習に励んでいました。気づけば県大まで一週間になっていました。大会でしっかり自分の力が出せるようにフォームや体を調整しているところでした。

「まだ一週間ある」

「毎日の努力はうそをつかない」

いつもの大会前と同じ気持ちで過ごしていました。

県大会一日前、私はメドレーリレーのことを考えていました。現在の県内ランキングでは五位、三位のチームとも一秒しか離れていませんでした。

「もしかしたら北信越大会に行けるかもしれない」

一瞬そんな気持ちにもなりました。でも自分たちよりタイムが上位のチームのメンバーは多くが三年生です。

「一年生だけの私たちのチームが勝つのは無理かな」

「負けても一年生だから仕方ない」

自分でも弱い気持ちが出てきているなあと思いましたが、それが正直な気持ちでした。しかし大会前からあきらめるわけにはいかないと自分に言い聞かせました。

「南中がんばれ」

「レースを楽しんでね」

これまでいろんな人たちから応援の言葉をもらいました。それを思い出し、改めて

「絶対にあきらめてはいけない」

レースは明日にせまっていました。

七月二十一日、いよいよ北信越大会の出場権のかかった決勝レースが始まりました。

「第四レーン長岡南」

名前が呼ばれました。極度の緊張から吐き気がしました。正直勝てる自信はありませんでしたが

「思いっきりやるしかない」

自分にそう言い聞かせました。

「Take your marks. ピッ」

レースはあっという間に終わりました。そう感じました。最後は接戦でした。四位との差は〇・〇九秒。気づけば三位でした。あまりのうれしさに四人で手を取り抱き合っていました。最高にうれしい瞬間でした。

家に帰ってレースのビデオを見ていたとき、気づいたことがありました。四位のチームが映っていました。

コースロープにもたれかかった最終泳者。ひざに手を置いて下を向いたままの第二・第三泳者。手で顔をおおい涙を流す第一泳者。メンバーは全員三年生でした。私はこの人たち三年生の夏にかけた思いの分まで泳がないといけないと心から思いました。

北信越大会の日がきました。思ったよりリラックスできていました。朝からあの三年生チームの姿が頭の中に流れていました。メドレーリレーは朝一番のレースでした。ここに立てなかったチームの思いが伝わってきて、いつもとちがう「ちから」を感じました。

結果は八位でした。ベストタイムではありませんでしたが、がんばれたという感覚が残りました。

あのレースから私の思いは変わりました。

スポーツには勝者と敗者がいます。

あの日、あの三年生チームはどんな思いだったのか。

もし私だったら、

「自分たちは三年生なんだから負けてくれたっていいのに」

そんなふうに思ったかもしれません。

「真剣に競った相手だからこそがんばってほしい」

とも思ったかもしれません。いろいろな思いがある中で、お互いが真剣に勝負することを通して、努力だけでは得られない「ちから」を高め合うことができるのだと思います。

私は今、夏のジュニアオリンピックを経験し、水泳に対する思いがさらに強くなりました。これからも家族やコーチ、ライバルから応援してもらえるような選手を目指していきたいと思います。

自分に力をくれたのは、競ったライバルの「ちから」だという言葉を胸に。